

§3.5 ベクトルの平行

定義 実ベクトル空間のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とが平行であるとは、 \mathbf{a} と \mathbf{b} とが同じ向きであるかまたは \mathbf{a} と \mathbf{b} とが逆の向きであることである。ベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とが平行であることを次のように書き表す： $\mathbf{a} // \mathbf{b}$ 。

ベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とが平行であることを、 \mathbf{a} と \mathbf{b} とが同じ方向であるともいいます¹⁾。ですから、 \mathbf{a} と \mathbf{b} とは、逆の向きのときも同じ方向です。

次のことを思い起こして下さい：各実数 a, b について

$$a = \pm b \iff a^2 = b^2 \iff \sqrt{a^2} = \sqrt{b^2} \iff |a| = |b|.$$

定理 3.5.1 実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とについて、

$$\mathbf{a} // \mathbf{b} \iff \mathbf{a} \cdot \mathbf{b} = \pm |\mathbf{a}| |\mathbf{b}| \iff |\mathbf{a} \cdot \mathbf{b}| = |\mathbf{a}| |\mathbf{b}|.$$

証明 $\mathbf{a} // \mathbf{b}$ とは、定義より、 \mathbf{a} と \mathbf{b} とが同じ向きであるかまたは \mathbf{a} と \mathbf{b} とが逆の向きであること、つまり $\mathbf{a} \cdot \mathbf{b} = |\mathbf{a}| |\mathbf{b}|$ または $\mathbf{a} \cdot \mathbf{b} = -|\mathbf{a}| |\mathbf{b}|$ となることである：

$$\mathbf{a} // \mathbf{b} \iff \mathbf{a} \cdot \mathbf{b} = \pm |\mathbf{a}| |\mathbf{b}|.$$

(証明終り)

定理 3.5.2 実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} について $\mathbf{a} // \mathbf{0}$ 。

証明 $\mathbf{a} \cdot \mathbf{0} = 0$ なので、 $|\mathbf{a} \cdot \mathbf{0}| = |0| = 0$ 。 $|0| = 0$ なので $|\mathbf{a}| |0| = |\mathbf{a}| \times 0 = 0$ 。従って $|\mathbf{a} \cdot \mathbf{0}| = |\mathbf{a}| |0|$ なので、定理 3.5.1 より $\mathbf{a} // \mathbf{0}$ 。

定理 3.5.3 実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とについて、

$$\mathbf{a} // \mathbf{b} \iff \mathbf{b} // \mathbf{a}.$$

証明 $\mathbf{a} \cdot \mathbf{b} = \mathbf{b} \cdot \mathbf{a}$ なので、定理 3.5.1 より、

$$\mathbf{a} // \mathbf{b} \iff |\mathbf{a} \cdot \mathbf{b}| = |\mathbf{a}| |\mathbf{b}| \iff |\mathbf{b} \cdot \mathbf{a}| = |\mathbf{b}| |\mathbf{a}| \iff \mathbf{b} // \mathbf{a}.$$

(証明終り)

以下の定理の証明は後にします。

定理 3.5.4 実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とについて、

$$\begin{aligned} \mathbf{b} // \mathbf{a} &\iff \mathbf{a} = \mathbf{0} \text{ またはある実数 } k \text{ をとると } \mathbf{b} = k\mathbf{a} \\ &\iff \mathbf{a} \neq \mathbf{0} \text{ ならばある実数 } k \text{ をとると } \mathbf{b} = k\mathbf{a}. \end{aligned}$$

例題 実数を表す変数 x, y について次の条件と同値となるべく簡単な条件を求めなさい：3次元実ベクトル $(x, y, 6)$ と $(5, 2, y)$ とが平行である。

$(5, 2, y) \neq \mathbf{0}$ なので、 $(x, y, 6) // (5, 2, y)$ である条件は、ある実数 k をとると $(x, y, 6) = k(5, 2, y)$ 、つまり、ある実数 k をとると $x = 5k$ かつ $y = 2k$ かつ $6 = yk$ ； $6 = 2k \cdot k$ なので、 $k^2 = 3$ 、 $k = \pm\sqrt{3}$ ；よって、 $x = 5k = \pm 5\sqrt{3}$ かつ $y = 2k = \pm 2\sqrt{3}$ 。3次元実ベクトル $(x, y, 6)$ と $(5, 2, y)$ とが平行である条件は、 $x = \pm 5\sqrt{3}$ かつ $y = \pm 2\sqrt{3}$ (複号同順)。終

問題 3.5.1 実数を表す変数 x, y について次の条件と同値となるべく簡単な条件を求めなさい：3次元実ベクトル $(x, 4, z)$ と $(9, x, 3)$ とが平行である。

平面ベクトルの平行に関しては次の定理が成り立ちます。

定理 3.5.5 任意の実数 a と b と c と d とについて、

$$(a, b) // (c, d) \iff ad = bc.$$

証明 定理 3.5.1 より、

$$(a, b) // (c, d) \iff |(a, b) \cdot (c, d)| = |(a, b)| |(c, d)|. \quad (1)$$

$|(a, b) \cdot (c, d)| \geq 0$ かつ $|(a, b)| \geq 0$ かつ $|(c, d)| \geq 0$ なので、

$$\begin{aligned} |(a, b) \cdot (c, d)| = |(a, b)| |(c, d)| &\iff |(a, b) \cdot (c, d)|^2 = |(a, b)|^2 |(c, d)|^2 \\ &\iff |(a, b)|^2 |(c, d)|^2 - \{(a, b) \cdot (c, d)\}^2 = 0, \quad (2) \end{aligned}$$

ここで、

$$\begin{aligned} |(a, b)|^2 |(c, d)|^2 - \{(a, b) \cdot (c, d)\}^2 &= (a^2 + b^2)(c^2 + d^2) - (ac + bd)^2 \\ &= a^2 c^2 + a^2 d^2 + b^2 c^2 + b^2 d^2 - (a^2 c^2 + 2acbd + b^2 d^2) \\ &= (ad)^2 - 2adbc + (bc)^2 \\ &= (ad - bc)^2, \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} |(a, b)|^2 |(c, d)|^2 - \{(a, b) \cdot (c, d)\}^2 = 0 &\iff (ad - bc)^2 = 0 \\ &\iff ad - bc = 0 \\ &\iff ad = bc. \quad (3) \end{aligned}$$

(1) と (2) と (3) とより

$$(a, b) // (c, d) \iff ad = bc.$$

(証明終り)

例題 変数 x について次の条件をなるべく簡単にする：ベクトル平面においてベクトル $(x, x+5)$ とベクトル $(3, 7)$ とは平行である。

$$(3, 7) // (x, x+5) \iff 3(x+5) = 7x \iff 4x = 15 \iff x = \frac{15}{4}.$$

つまり $x = \frac{15}{4}$ 。終

問題 3.5.2 変数 x について次の条件をなるべく簡単にしなさい：ベクトル平面のベクトル $(x, 2)$ と $(5, x-3)$ とは平行である。

例題 変数 x について次の条件をなるべく簡単にする：座標平面の点 $A = (3, 4)$ と $B = (x, 6)$ と $C = (3, x)$ と $D = (x, 7)$ とに対して、ベクトル \overrightarrow{AB} と \overrightarrow{CD} とが平行である。

$$\begin{aligned} \overrightarrow{AB} &= (x, 6) - (3, 4) = (x-3, 2), \\ \overrightarrow{CD} &= (x, 7) - (3, x) = (x-3, 7-x). \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \overrightarrow{AB} // \overrightarrow{CD} &\iff (x-3, 2) // (x-3, 7-x) \iff (x-3)(7-x) = 2(x-3) \\ &\iff 2(x-3) - (x-3)(7-x) = 0 \iff (x-3)(x-5) = 0 \\ &\iff x = 3 \text{ または } x = 5. \end{aligned}$$

ベクトル \overrightarrow{AB} と \overrightarrow{CD} とが平行である条件は、 $x = 3$ または $x = 5$ 。終

問題 3.5.3 変数 x について次の条件をなるべく簡単にしなさい：座標平面の点 $A = (4, 6)$ と $B = (x, 9)$ と $C = (8, x)$ と $D = (2x, 7)$ とについて、ベクトル \overrightarrow{AB} と \overrightarrow{CD} とが平行である。

ベクトルの平行について以下の定理が成り立ちます。

定理 3.5.6 実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} と \mathbf{c} とについて、 $\mathbf{a} // \mathbf{b}$ かつ $\mathbf{b} // \mathbf{c}$ かつ $\mathbf{b} \neq \mathbf{0}$ ならば、 $\mathbf{a} // \mathbf{c}$ 。

定理 3.5.7 実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} と \mathbf{c} と及び任意の実数 p と q とについて、 $\mathbf{a} // \mathbf{c}$ かつ $\mathbf{b} // \mathbf{c}$ ならば、 $p\mathbf{a} + q\mathbf{b} // \mathbf{c}$ 。

——— 定理の証明

定理 3.5.4 実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とについて、

$$\begin{aligned} \mathbf{b} // \mathbf{a} &\iff \mathbf{a} = \mathbf{0} \text{ またはある実数 } k \text{ をとると } \mathbf{b} = k\mathbf{a} \\ &\iff \mathbf{a} \neq \mathbf{0} \text{ ならばある実数 } k \text{ をとると } \mathbf{b} = k\mathbf{a}. \end{aligned}$$

証明 ベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とについて $\mathbf{b} // \mathbf{a}$ とする。 \mathbf{a} と \mathbf{b} とは同じ向きであるかまたは \mathbf{a} と \mathbf{b} とは逆の向きである。 $\mathbf{a} \neq \mathbf{0}$ ならば、定理 3.4.4 より、 \mathbf{a} と \mathbf{b} とが同じ向きであるとき $\mathbf{b} = \frac{|\mathbf{b}|}{|\mathbf{a}|} \mathbf{a}$ 、 \mathbf{a} と \mathbf{b} とが逆の向きであるとき $\mathbf{b} = -\frac{|\mathbf{b}|}{|\mathbf{a}|} \mathbf{a}$ 。

ベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} とについて $\mathbf{a} = \mathbf{0}$ またはある実数 k について $\mathbf{b} = k\mathbf{a}$ とする。 $\mathbf{a} = \mathbf{0}$ のとき、定理 3.5.2 より $\mathbf{b} // \mathbf{a}$ 。 $\mathbf{b} = k\mathbf{a}$ となる実数 k があるとすると、このとき、

$$\begin{aligned} \mathbf{a} \cdot \mathbf{b} &= \mathbf{a} \cdot (k\mathbf{a}) = k(\mathbf{a} \cdot \mathbf{a}) = k|\mathbf{a}|^2, \\ |\mathbf{a} \cdot \mathbf{b}| &= |k|\mathbf{a}|^2 = |k| |\mathbf{a}|^2. \end{aligned}$$

また、 $|\mathbf{b}| = |k\mathbf{a}| = |k| |\mathbf{a}|$ なので、

$$|\mathbf{a}| |\mathbf{b}| = |\mathbf{a}| |k| |\mathbf{a}| = |k| |\mathbf{a}|^2.$$

従って $|\mathbf{a} \cdot \mathbf{b}| = |\mathbf{a}| |\mathbf{b}|$ なので、定理 3.5.1 より $\mathbf{a} // \mathbf{b}$ つまり $\mathbf{b} // \mathbf{a}$ 。(証明終り)

定理 3.5.6 実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} と \mathbf{c} とについて、 $\mathbf{a} // \mathbf{b}$ かつ $\mathbf{b} // \mathbf{c}$ かつ $\mathbf{b} \neq \mathbf{0}$ ならば、 $\mathbf{a} // \mathbf{c}$ 。

証明 ベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} と \mathbf{c} とについて、 $\mathbf{a} // \mathbf{b}$ かつ $\mathbf{b} // \mathbf{c}$ かつ $\mathbf{b} \neq \mathbf{0}$ とする。定理 3.5.4 より、 $\mathbf{a} = h\mathbf{b}$ となる実数 h があり、 $\mathbf{c} = k\mathbf{b}$ となる実数 k がある。従って、

$$\begin{aligned} \mathbf{a} \cdot \mathbf{c} &= (h\mathbf{b}) \cdot (k\mathbf{b}) = hk(\mathbf{b} \cdot \mathbf{b}) = hk|\mathbf{b}|^2, \\ |\mathbf{a} \cdot \mathbf{c}| &= |hk|\mathbf{b}|^2 = |hk| |\mathbf{b}|^2. \end{aligned}$$

また、 $|\mathbf{a}| = |h\mathbf{b}| = |h| |\mathbf{b}|$ 、 $|\mathbf{c}| = |k\mathbf{b}| = |k| |\mathbf{b}|$ なので、

$$|\mathbf{a}| |\mathbf{c}| = |h| |\mathbf{b}| |k| |\mathbf{b}| = |hk| |\mathbf{b}|^2.$$

$|\mathbf{a} \cdot \mathbf{c}| = |\mathbf{a}| |\mathbf{c}|$ なので、定理 3.5.1 より $\mathbf{a} // \mathbf{c}$ 。(証明終り)

定理 実ベクトル空間の任意のベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} と \mathbf{c} と及び任意の実数 p と q とについて、 $\mathbf{a} // \mathbf{c}$ かつ $\mathbf{b} // \mathbf{c}$ ならば、 $p\mathbf{a} + q\mathbf{b} // \mathbf{c}$ 。

証明 ベクトル \mathbf{a} と \mathbf{b} と \mathbf{c} とについて $\mathbf{a} // \mathbf{c}$ かつ $\mathbf{b} // \mathbf{c}$ とする。 $\mathbf{c} = \mathbf{0}$ のときと $\mathbf{c} \neq \mathbf{0}$ のときとに場合分けする。

$\mathbf{c} = \mathbf{0}$ のとき、定理 3.5.2 より $p\mathbf{a} + q\mathbf{b} // \mathbf{c}$ 。 $\mathbf{c} \neq \mathbf{0}$ とする。 $\mathbf{a} // \mathbf{c}$ かつ $\mathbf{b} // \mathbf{c}$ なので、定理 3.5.4 より、 $\mathbf{a} = h\mathbf{c}$ となる実数 h があり、 $\mathbf{b} = k\mathbf{c}$ となる実数 k がある。従って、

$$p\mathbf{a} + q\mathbf{b} = p(h\mathbf{c}) + q(k\mathbf{c}) = (ph + qk)\mathbf{c}.$$

定理 3.5.4 より $p\mathbf{a} + q\mathbf{b} // \mathbf{c}$ 。(証明終り)

¹⁾ 数学では“向き”という言葉と“方向”という言葉とでは少し意味が違います。例えば、数学的には、東西は方向であり、この方向に東向きと西向きとがあります。このように、ある向きとその反対の向きとを併せて一つの方向になります。